2009

環境問題を意識づける価値の創造の研究

Creating the Value of Consciousness on Environmental Problems:
From Zero Trash to Full Creativity

AD11　齋藤　絵利花
指導教員　西野　隆司

1. 研究目的

環境について考えたとき、深刻な問題もあるが普段の生活の中で、変化が見られないように感じた。それが何故なのか考えた結果、生活の中で環境問題に関連づけることが少なく、環境に配慮する事は何かを我慢するというマイナスなイメージから、その行動が長続きできない点にあるのではないかと考えた。「何かを我慢する」のではなく「何かをする事で生活が楽しく、豊かになる」という価値を与える事で自然に環境問題に対する意識を変えていくことを目的とする。

2. 調査と分析

環境問題からエネルギー問題に着目した。その中で日本の家電と照明のエネルギー消費が世界の消費量と比べて多く、その原因は照明文化の違いからきていることが分かった。海外では間接照明が多く使用され、日本では天井照明が一般的に使用されている。日本は蛍光灯が戦後の経済成長期に普及し、明るさが幸せの象徴の様になったことから、部屋全体を明るく照らす文化が生まれた。

しかし、江戸時代を調べると、蝋燭や行灯などの間接照明を使用していた。また、昭和初期に書かれた谷崎潤一郎の『陰影礼讃』では、可能な限り部屋を明るくし陰影を消す事に執着するのではなく、むしろ陰影を認めそれを利用することが日本古来の芸術の特徴だと主張している。

これらの調査結果から、現代の日本には暗闇や薄暗さにあまり親しみがなく、天井照明を常に使用することで消費エネルギーが上がってしまっていることが分かった。

3. コンセプトの立案

「暗さを楽しむ」
これらの調査、分析から今日の日本の照明に対する価値観に対し、暗さを楽しむ照明の価値創造を提案する。

4. デザイン展開

まず、「暗さを楽しむ」ために必要な良い明りとはどのようなものかを探るため、様々な素材でプロトタイプ制作を進めていった。その中でいずれゴミとなる紙袋、空き瓶、新聞紙などが照明として良い表現を出す事が分かり、それらを照明として再利用する事で照明の新たな価値創造を行なった。

第1モデル（写真1）：蝋燭・空き瓶・段ボール
第2モデル（写真2）：蝋燭・空き缶
第3モデル（写真3）：ソーラーライト・段ボール

（写真1）

（写真2）

（写真3）

これまで制作したプロトタイプと、上記3つのモデルの光の印象についてヒアリングを行ったところ、蝋燭の明かり自体はとても綺麗、燃えそうだけど紙の光が良い、古本の行燈のアイディアが良い、など、光については良い印象を与えることが出来た。また、火の安全性についての心配の声もあった。さらに外見のことでは、もう一工夫してほしい、綺麗だけどわざわざこれを使いたいと思えない、などの意見もあった。

これらのことから、光の印象として好評であった紙素材と蝋燭を使用し、安全性を考慮して紙と蝋燭の間に燃えにくい空き缶を隔てる。火を扱う蝋燭だけでなく安全な LED ソーラーライトも使うことのできる照明を制作した。形はぼんぼりをモチーフとし、昔日本で使用されていた間接照明のイメージをもたせた。蝋燭を使用する場合は（写真4）のようにし、ソーラーライトの場合はひっくり返す（写真 5）ことで2種類の明かりが楽しめるような構造になっている。

5. 完成図

（写真4）

（写真 5）

（点灯時）

6. 結論

今回の研究の結果、ゴミ素材を再利用したものでも良い明かりを生み出せるという所に興味を持ってもらう事で、使ってみたいと思わせることが出来、暗さを楽しむ照明の価値創造が出来たと考えられる。将来的には、スローな時間を過ごす事で豊かな生活に繋がることに気付いてもらえたら良いと思う。

文　献

[1] 『なぜ日本はヒートショックの被害者が一番多いのか』
http://allabout.co.jp/gm/gc/441521/
[2]谷崎純一郎,『陰翳礼讃』, 中央公論社,1995/9/18